

- 黒部地域は県内屈指のねぎ産地であったが、高齢化、連作障害等により産地の規模は年々縮小。
- 規模拡大を目指し、**新規生産者の掘り起こしと技術伝承、規模拡大に向けた支援活動を行い**、さらに関係機関と連携しながら、調製作業の改善や長期出荷体制の整備を進める。
- その結果、面積が1ha以上の4経営体が育成される等により、出荷期間及び出荷量が増加、**産地規模はV字回復**した。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 大規模経営体の育成

- **栽培面積1ha以上の4経営体が育成**され、面積シェア58%を占める。最も大きい経営体は2.8ha
- 育成された経営体は、個別自己完結、1戸1法人、集落営農等、経営類型は多様、指標モデルとして、作付誘導の際に活用

2 生産性の向上

- 品種やは種方法を工夫することで高温期の出荷が増え、出荷期間、出荷量が増加(平成21年17t→令和2年63t)
- **調製作業場内のレイアウト指導で処理能力が10%程度向上**
- 出荷量増加に対応した関係機関の出荷施設整備により長期出荷体制が確立(分荷調整出荷も可能となる)

3 産地規模の拡大

- 直近年は平成21年と比べ**栽培面積260%、出荷量328%、販売額389%増加**



1 新規生産者の掘り起こし

- 産地近傍の集落営農組織や法人経営体に作付推進活動を実施
- 推進活動は、機械実演会や県研修会、視察等も活用、**粘り強く取組み、新規生産者を確保**



- 関係機関の出荷施設や苗供給体制の整備を支援

2 産地技術の伝承と改善

- 新規生産者に産地の技術伝承を実施
- 収穫時期別の優良品種選定、管理技術の改善による出荷期間の長期化

3 指導体制の強化

- 市町村、**JA等関係機関の参画により**、作業改善を目的とした**チームを作り、技術情報を共有**

普及指導員だからできたこと

- ・**産地再生に向けたのビジョンを提案**、新規栽培者の募集や、関係機関の協力を取り付け、それぞれが役割を発揮できるよう調整を実施

- ・早期出荷や、大規模経営体の作業分散に対応する、技術体系を立案実施し普及



出荷量と販売額の推移

富山県

白ねぎ産地の担い手育成と生産性向上による規模拡大

活動期間：平成 22 年度～（継続中）

1. 取組の背景

「黒部しろねぎ」は、昭和 40 年代に栽培が始まり、昭和 50 年に生産組合が設立、米の生産調整の本格導入とともに作付けが拡大し、昭和 61 年には共同選別施設が整備された。平成元年～5 年までは出荷量約 300t、販売額は 1 億円を超える、県内屈指のねぎ産地であった。

しかし、平成 9 年以降、生産者の高齢化、連作障害や排水不良等により収量が減少し、平成 20 年頃には栽培面積 5 ha、出荷量 70t、販売額 2 千万円までに落ち込んだ。

そこで、平成 22 年より伝統あるブランド産地の復活を目指し、濃密かつ継続的な普及活動に取り組んだ。



写真 1 大規模経営体の収穫作業

2. 活動内容（詳細）

（1）新規生産者の掘り起こし(大規模経営体の育成)

市東部の集落営農組織や法人経営体をリストアップし、作付推進活動を行った。

ア ねぎの作付けに向けた啓発活動

- ・ J A や黒部市農業技術会議等の広報誌を活用した新規栽培者の募集、栽培希望者との導入相談会の実施
- ・ 主穀作経営体へ白ねぎ導入の経営モデルを提示
- ・ 機械作業体系実演会の開催による機械導入推進
- ・ 県研修会の参加誘導、優良産地視察の実施支援



写真 2 調製作業の改善指導

イ 規模拡大に向けた支援活動

- ・ モデル経営体選定による栽培技術・経営改善重点指導
- ・ 県単事業の活用による計画的な省力機械の整備支援（ベストロボ等による調製・選別の省力化）
- ・ 白ねぎに加え、ねぎたんTM、ハウスねぎの作付推進
- ・ J A 調製選別施設の能力増強や保冷庫の導入支援
- ・ 共同育苗による生産者への苗供給体制の確立支援



写真 3 ねぎたんTMの生産開始 (H18)

(2) 技術の伝承と進化

- ・ 早期出荷の実証(越冬初夏どり等)や出荷時期に応じた優良品種の選定
- ・ 省力機械(定植溝切り、定植、土寄せ、収穫、調製)作業の精度向上
- ・ 定期的な品質点検の実施、作業場での調製改善

(3) 指導体制の強化

- ・ J Aねぎ機械化促進プロジェクトチームの設立 (J A、全農、県、市) 及びチームによる技術情報の共有化 (活動計画策定、栽培カルテ、合同巡回)
- ・ J Aの若手営農指導員の参加誘導、技術習得支援
- ・ 産地づくり支援研修等OJTによる営農指導員の指導力強化

3. 具体的な成果 (詳細)

(1) 大規模経営体の育成

ア 栽培面積 1 ha 以上の 4 経営体を育成 (シェア率 58%)

- ・ 平成 21 年 : 栽培面積 1 ha 以上は 0 経営体
- ・ 令和 2 年 : 最も大きい経営体は 2.8ha

イ 3 タイプの経営体を育成

- ・ 個別自己完結タイプ、1 戸 1 法人タイプ、集落営農タイプに分け、新規作付推進指標 (モデル) として活用

(2) 生産性の向上

ア 新品種「夏山一本太」の「2 粒まき」の導入により 7~8 月出荷量が増加

- ・ 平成 21 年 : 17.1t → 令和 2 年 : 63.3t となり出荷期間が拡大

イ 機械、人の配置改善指導による調製作業の能力向上

→ 1 日当たりの出荷量が 10% 程度向上 (2 組織)

ウ J A 主体による選別機更新、保冷库増設により 7~2 月の長期出荷体制が確立

- ・ 選別場に根切機 1、葉切機 2、皮むき機 1、選別機 2 台導入
- ・ 最大 3,000 箱が保冷可能となり、分荷調整出荷が可能

(3) 栽培面積、出荷量、販売額の拡大(図 1, 2)

- ・ 平成 21 年 : 栽培面積 5 ha、出荷量 67t、販売額 18 百万円
- ・ 令和元年 : 栽培面積 13.1ha、出荷量 220t、販売額 70 百万円

(4) 新川管内の白ねぎ生産拡大への波及(管内 3 J A 合同研修会等の実施)

- ・ J A みな穂 平成 21 年 : 0 ha → 令和 2 年 : 7 ha J A 選別場の整備 (令和元年)
- ・ J A うおづ 平成 21 年 : 0.4ha → 令和 2 年 : 3.2ha モデル経営体の育成

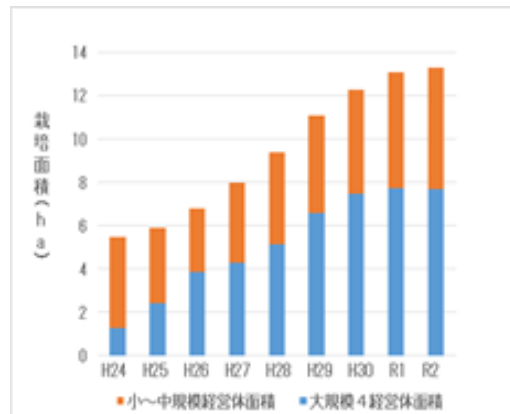


図 1 栽培面積の推移



図 2 出荷量と販売額の推移

4. 農家等からの評価・コメント（黒部市 A氏）

ここまで産地が復活するとは驚きである。関係機関には感謝するばかりである。やはり、作期に応じた優良品種を選定し、高性能省力機械を数十台導入したことが大きい。まだ、単収が低いので(個人、産地とも)、基本技術を徹底し更なる向上を目指したい。

5. 普及指導員のコメント

〔 新川農林振興センター担い手支援課
園芸振興班・副主幹普及指導員・石川治宏 〕

産地の主役は生産者である。普及は、生産者が自ら考え、判断し、実行するのをお手伝いするだけである。昭和、平成、令和の3時代を歩き続けた黒部白ねぎ産地を今後も普及の力でつないでいきたい。

6. 現状・今後の展開等

令和4年春開業予定の道の駅「KOKOくろべ」と連携し、ブランド力の強化を図り、県内最大の白ねぎ産地として更なる発展を目指す。

(1) 新規生産者の掘り起こしと育成

→法人経営体を中心にリストアップし、農業普及課やJA営農指導員と共に作付推進

(2) 地域輪作体系による水田フル活用

→近隣の集落や営農組織の土地も活用しながら連作を避けた排水性の高い圃場の確保

(3) 産地の拡大

→個人生産者の技術サポート・育成とともに大規模経営体を中心とした産地づくり